

# イメージ行為について

高 月 玲 子

On the Act of Image

TAKATSUKI Reiko

## I. はじめに

イメージは、心的現象として心理学においてさまざまなアプローチが試みられてきた。なかでも臨床心理学の現場である心理療法は、イメージそしてイメージすることと深く関係していると考えられてきた。また、イメージ (image) は一般に心像と訳されているが、また mental imagery にも心像の訳語があてられており、翻訳上の難しさだけでなく、捉えようとする現象そのもののあいまいさを物語っている。心的現象としてのイメージを厳密に定義することは非常に難しい。けれども周知の通り夢はイメージの代表格であろうし、イメージを技法上に採り入れた「イメージ療法」が確立されるなど、イメージの名のもとに臨床上の体験を通して多様な意味付けがなされてきた。イメージの生命力は一学問の世界におさまりきれものではないと思われるが、イメージの諸研究に共通して興味をもたれるのは、イメージの自律性に注目している点である<sup>1)2)3)</sup>。例えば河合は「イメージはそれ自身の自律性を持ち、自我のコントロールを越えているところが第一の特徴」と述べている<sup>3)</sup>。私たちの日常生活に翻ってみても、「イメージが浮かぶ」、「イメージがわく」という言い方をし、また「イメージする」ことはできてもイメージを厳密に操作することは難しいように、イメージを自律的なものとして捉えてきた。イメージするというこの人間特有の行為に一体どういうはたらきをみてとることができるのだろうか。そしてイメージする主体はイメージであるとしか言えないのだろうか。河合は「イメージそのものの研究は不可能である」とも述べている<sup>4)</sup>。それはイメージを研究する姿勢への警句ともとれるかも知れない。対象化を拒み続けるイメージをめぐる現象のただ中に身をおく私たちに出来ることを探りつつ、先の問いへの手掛かりを得るために、いくつかの知見を振り返りながら考えてみたい。

## II. 実験心理学の捉えるイメージについて

研究対象を明確に定める必要のある実験心理学の分野では、イメージとして操作的に定義されたのはどのような現象なのだろうか。また対象とされたのはどのようなイメージの特性なのだろうか。A. リチャードソン<sup>5)</sup>が『心像 (Mental Imagery)』(1969)においてイメージ研究を包括的

に検討した際の分類—残像、直観像、記憶心像、想像心像—にそって概観しておくことにする。

残像 (after image) とは、刺激となる素材が取り去られた後でも、与えられた刺激に関連して生じる現象をさす。何かを見つめてから目を閉じたときに生じるような視覚残像はその代表例だが、聴覚や圧覚 (例えば帽子を脱いだ後)、温度感覚、前庭感覚 (例えば船から降りた後の揺れ) 等の領域でもみられる。このように実際の刺激によって引き起こされた感覚、知覚器官レベルの反応としてイメージは捉えられた。また視覚残像では原刺激と同色の陽性残像と補色のな色を帯びる陰性残像とを区別したように、あくまでも原刺激を基準に像の特性が測られたのである。

直観像 (eidetic image) とは、刺激を取り除いた後でもその像を明瞭に、しかも長時間持続して捉えることができる像のことである。例えば絵をじっと見続け、直観像が形成されると、絵がなくてもまるでその絵を見ているように、絵に関する質問に答えられたり、像の中の一部を動かせたりする像をいう。また、児童が意味も知らない長いスペルの他国語の単語を見た後、前からでも後ろからでも綴れるという現象も直観像とみなされる。直観像は残像のように誰にでも生じるものではなく、児童や未開社会で多く見られる。けれども直観像の能力を持っている児童でも、発達と共に能力が減少するケースが多いと考えられている。また、脳損傷遅滞児にその他の原因による遅滞児よりも直観像が多く現れるともいわれており、器質的な要因が仮定されている。直観像という現象は、メカニズムの仮説が多様で、研究間の矛盾も含まれているように思われる。けれども本人の感情や抽象化能力によって意味が与えられたり統合されない直観像は、きわめて感覚的なイメージであり、確かに記憶心像とは異なる現象である。

リチャードソンは、イメージの4分類間には類似点もあるとしながら、像の「鮮やかさ」と「統御可能性」の次元に分類基準を設けた。残像は比較的鮮やかであるが、統御は不可能で、感覚受容器での刺激の存続に依存している。また直観像は、比較的鮮やかでかつ統御はやや可能という位置に置かれている。「鮮やかさ」は原刺激の知覚体験のインパクトを基準にした尺度であり、「統御可能性」とは本人による像の操作可能性を指す。ここで自律性との関連を見てみると、「統御不能性」イコール「自律性」とはならない。統御の不可は末梢神経系と中枢神経系の働きを下敷きにして、残像、直観像の現象はともにより因果関係的な説明法が用いられている。

さて、残像や直観像に比べ、「鮮やかさにおいては劣るが、より統御可能」な像として位置づけられたのが記憶心像である。これは、「過去の出来事の再生や現在進行中の考えや未来の予期的活動ないしは出来事に付随して生じる」。残像や直観像と共通して知覚的基礎はあるけれども、意思的あるいは自然発生的に生じるとされている。イメージの内容に関しては因果関係的に説明づけられるが、特に自然発生的なイメージ形成に関しては、過去に遡って存在する原刺激との関係に一貫した理論的説明はなされていない。また、「統御可能性」についてはイメージが生じた後の問題として考えられている。自律性と関連のあるものには、リチャードソンが取り上げたR. ゴードンの「イメージ統御検査 (1949)」があげられよう。この検査では、一台の自動車をイメージさせて、色を変化させたり、逆さまにひっくり返せたりと、次々と自動車の光景を変えられるかを尋ね、全問に変えられると答えた場合は被検者のイメージを「被統御的」とし、一つでも変えられない場合は「自律的」と分類した。ゴードンは、意識的に統御できず「自律的」であることを、イメージとそれまでの経験との結び付きの強さによって説明した。このように記憶に基づいて形成された像であっても、統御できない場合もありうることも報告されているのは興味

深い。しかし残像や直観像とは異なっているものの、記憶心像もまた原刺激という先行条件に統御を受けるといふ枠組みからは逃れられてはいないのである。ただし、ここで取り上げられた自律的な記憶心像の現象は、統御可能性と不能性を連続性のものでは説明できないことを示唆していると思われる。

記憶心像とは異なって想像心像は、明瞭で真実らしく生じ、しかも統御不能なイメージである。記憶心像は特定の事物の再生であるが、想像心像は「確かに再認されたもののイメージではあるが、あれこれの特定の個性的対象として再認されてはいないもののイメージ」である。想像心像は、入眠時像や夢の他、知覚遮断、幻覚剤、瞑想など特殊な状況下で生じるとされている。そのイメージ内容は幾何学的形態やまとまりのある風景など、イメージする者にとって直接経験のないものや、現実には存在しないものにまでおよぶ。想像心像は、知覚的基礎の有無は確定されていないため、その「統御不能性」は記憶心像にみられたゴードンの「自律性」とは別のものである。イメージを出現させることは先行条件に操作されると考えられているが、記憶心像のようにイメージ内容を条件づけることはじゅうぶんには出来ないのである。想像心像は、因果関係をもつ感覚、知覚的現象として捉えることが難しく、そのぶん研究は特殊状況下へと細分化されていった。(また、この4分類はフェヒナーやイェンシュの感覚と表象を対極とした構想と似ているとの指摘が訳者によってなされており、感覚レベルから遠ざかるにつれ、因果関係の説明が難しくなるのはこの分類構造自体に起因しているとも考えられよう。)

こうしてリチャードソンは残像から想像心像までを包括して、イメージを「(1)準感覚的または準知覚的体験であり、(2)われわれがそれに自己意識的に気づいており、(3)それに対応した本物の感覚ないし知覚を生み出すことが知られているような刺激条件が実際に存在しないのに、われわれにとって存在しているような経験であり、(4)その刺激条件に対応した感覚ないし知覚の場合とは違った結果をもたらすような経験」と定義した。この定義には分類の基準となった「鮮やかさ」と「統御可能性」のうち後者についてはほとんど触れられてはいない。このことから統御可能性に関する現象は実験心理学の分野でも十分に対象化しにくい問題であることがわかる。そして私たちが今問題にしようとしているイメージの自律性と、リチャードソンが取り上げた「統御可能性」および「統御不能性」とは意識的に操作できるかどうかという規定を置いている点では共通している。けれどもリチャードソンの「統御不能性」が、裏を返せば知覚および記憶への依存性となる点は一致しない。基礎心理学ではイメージの現象の説明はどうしても外的条件に求めることになる。けれども想像心像に見られるように、イメージの自律性を体験する面接室とはあまりにもかけはなれた特殊条件下の研究は、果たして私たちに得るところがあるのだろうか。

ながながと基礎心理学におけるイメージ研究をみてきた。臨床心理学では基礎心理学とは別に、イメージを内界と関連のある現象として捉えようとする。統御の不可が必ずしも一定していない記憶心像や想像心像は臨床心理学の領域と最も関連が深いと思われる。次にイメージの自律性を語るうえで最も適切と思われる夢を取り上げ、臨床心理学の分野から考えてみたい。

### Ⅲ. 「夢の作業」における自律性

夢を臨床心理学的に取り上げた最初の人フロイトである。フロイトはその著『夢判断』<sup>6)</sup>で

夢についての洞察を深め、夢には意味がある、夢は欲望の充足体験であるという命題に取り組んだ。

フロイトは「夢の源泉」についてこう考えた。「夢の内容を作り上げる材料は、どんなものであろうとも、人がそれまでに体験したものから、何らかの方法で採ってこられたもの」であり、「材料は夢の中で再生産され、思い出される」。また、本人には記憶が全くないことを夢にみることもあることから、「覚醒時の想起能力の支配圏外にあった何物か」を材料と想定し、夢は「全然覚えのないような記憶を自由に駆使する」とされた。しかしフロイトにとって身体刺激や日中残滓物、さらに幼児期の記憶といった夢の材料の探究は、夢の顕在内容の素材の出所を説明するためのものではなかった。夢の分析の仕事とは、「夢の本当の意味（潜在内容）」を与える、つまり解釈することにある。顕在内容の外的な先行条件との関係ではなく、夢の顕在内容と潜在内容との関係へと視点は向けられる。「夢はわれわれにとって心の所産である。とはいうものの、夢はわれわれにとって何か縁のないようなもののように思われる。“夢を見た”というのと同じように、好んでわれわれはまた“夢で（これこれのことを）見た”ともいうほどに、われわれは自分が見た夢の責任を自分で負う気にはなれないのである。それほど夢はわれわれと無関係であるように思われる。夢のこういうよそよそしさはどこからやってきたのだろうか」と、夢の統御不能性、同時に自律性に注目する記述が見られる。そして「それは夢の内容を作り上げている材料のせいではなく、そういう印象を呼び起こすような（夢における）心的過程の変化のせいではあるまいか」と夢においてはたらく機制の存在を仮定した。それが夢思想（潜在内容）を夢内容（顕在内容）へと歪曲させる「夢の作業」である。こうして圧縮（Verdichtungsarbeit）、置き換え（Verschiebungsarbeit）、形象性への配慮（Die Rücksicht auf Darstellbarkeit）、二次加工（sekundäre Bearbeitung）の4つの機制が検討された。中でもはじめの3つは、夢思想を直接の材料にした機制である。夢の解釈において心的材料となるのは顕在内容ではなく潜在内容である。フロイトは「夢の作業」を想定することによって、元の言語を別の言語へと翻訳する関係にたとえられているように統御不能な夢に意味を与え、「覚醒時の、われわれの充分納得の行く心的諸行為の関連の中に組み込む」ことをめざした。このように、夢の思想は覚醒時の思想と同じ論理で成り立っていると考えられていることがわかる。圧縮などの歪曲の謎を解くように夢の作業を逆にたどることによって、奇妙さや不条理さとなって現れている夢の自律性に覚醒時に通用する意味を与える。これは解釈に他ならず、解釈は、夢内容からの連想を夢の作業の機制の中に絡めとりつつ、自律性の克服をめざしたと言えよう。

ここで、「夢の作業」の機制を通して『夢判断』において夢がどう捉えられていたかを考えてみたい。フロイトは夢内容の一つの要素から連想を次々に繰り出していきながら、「夢の作業」のメカニズムを巧みに形作っていった。フロイトは臨床体験をもとに、分析における一連の連想を確信をもって潜在内容中の観念結合から派生したものと考えていた。例えばフロイトの「植物学研究書の夢」では、「植物学」から連想することによっていくつものテーマが浮かびあがってくる。それらのテーマは「夢の中の無数の観念系列」、「夢思想」として扱われることになる。そして今度は各々のテーマが材料になって、「植物学」へと歪曲、擬装、あるいは検閲が施される夢の作業過程が解明されていく。この夢では各テーマの内容から「植物学」という言葉が選ばれ、その他の内容はまったく省略され、「植物学」に圧縮される作業過程として説明される。この作

業の背景には、「夢は言葉を事物のように扱う」とするフロイトの考え方がある。様々な意味内容のテーマへと導く連想の発端であった「植物学」は、その多義性ゆえに採用されたはずである。けれども圧縮では、まず各テーマ間の関連に意味は認められず、テーマは個別的に扱われ、さらにテーマの中から切り離されて、言葉はきわめて機械的、物理的に扱うことも許されるのである。だから、「植物学」の象徴機能は問われず、もっぱら夢思想間の言葉の上での共通項としか見なされない。

さてもう一つの作業、置き換えの作業ではどうだろうか。先の例でいうと、顕在内容における「植物学」にまつわるテーマは実生活上のフロイトにとってまったく思い当たることのないものと捉えられ、一方で、「植物学」からの連想によって取り上げられたテーマ、観念はそれぞれに心的価値があると考えられる。圧縮の結果、「植物学」は多元決定され、その上見慣れないテーマに仕立てられたと仮定される。「夢の作業にはある心的な力が働いている。そしてこの力は、一方では心的に価値度の高い諸要素からエネルギーを剝奪し、他方では多面的制約（多元決定）の道を通じて、価値度の低い諸要素を変じて新しい・価値ある諸要素に作り変える。…夢形成においては個々の要素の心的強度の転移および置き換えが行われるということになる。…このように想定される過程が、まさに夢の作業の主要部分である。…夢の移動作用と圧縮作用は、われわれの活動に夢の形成を帰せしむべき二人の職工なのである」。まず、一度エネルギーを剝奪された夢思想は連想によって蘇ったことになる。そして諸夢思想と夢内容の間で行われているのは、エネルギーの移動と「植物学研究書」という新しい要素に作り変える作業と考えられた。ここではエネルギーは「植物学研究書」にまつわる顕在内容を作りだす資源となっているのである。圧縮では夢思想の意味内容から言葉を遊離させたように、置き換えでは意味内容から量的なエネルギーを分離独立させて捉えている。そしてエネルギーは心的価値の高い方から低い方へと置き換えられるわけである。このエネルギーの流れは検閲をくぐりぬけるためのものであるという。夢内容は多くは検閲によって支配されているとも考えられよう。

次に取り上げなければならないのは、第二種の置き換えとも表現されている「形象化への配慮」である。これは先のエネルギーによる新しい価値の形成の作業にあたるであろう。これは夢思想の抽象的あるいは言語的表現の中から形象的、具象的に表現できるものが優先的に採用され、形象、具象物に置き換える作業である。形象の中でも特に視覚的形象が優先される。例えば、音楽家を愛していた女性の夢に登場する塔（頂上に指揮者がいて、土台の周囲にいるオーケストラを指揮している）は、その高さとおけストラによって音楽家の偉大さの表現と考えられた。この作業に「魂の何か特別な象徴化的活動を仮定する必要はなく、夢が無意識的思考の中にすでに出来上がって保有されているところの、このような象徴化を使用するのは、このような象徴化はその表現可能性ゆえに、夢形成の諸要素に他のものよりもよりよく応じるため」であり、形象的表現への置き換えは夢思想の「変装手段」として見なされ、象徴化の働きには触れられても、主題的には扱われなかった。形象化は言語から非言語への置き換えと考えられるが、形象化されたものも結局言語的な資格しか与えられないのである。夢に対して、象徴表現を作り出すような働きをフロイトは「夢判断」では認めなかったのである。夢の作業ではあくまでも夢思想が主題である。また、夢思想という潜在内容の存在を確保するためにも、夢の作業は不可欠であった。

「夢の作業」の独特のメカニズムは、夢の退行的性格によって説明されている。リクール<sup>7)</sup>が

指摘しているように、夢の思想つまり抑圧された欲望を発見することは、退行の過程をたどることである。顕在夢の荒唐無稽な物語性に示される新たな意味の萌芽よりも、潜在夢と欲望の関係が最も重要であるため、顕在夢をエネルギーの方へ、リビドーの方へと向かわせる。それは意味の概念から力の概念へと遡ることである。夢の作業によって被った変化を探ること、すなわち抑圧されていた願望を探し出す夢の解釈は、翻訳の比喩とは異なった複雑さを帯びる。リコールは「夢の作業」を意味と力の混合構造として捉えている。メカニズムの複雑さの理由の一つはこの混合構造であるかも知れない。そして夢の作業を説明するために導入された退行の概念、局所論的概念によっても一層複雑になってゆくように思われる。顕微鏡や望遠鏡の装置にたとえられた運動末端から前意識、無意識、記憶組織を経た知覚末端への退行によって、夢思想の構造は解体し、元の素材に戻る方向をとるといふ。記憶組織にある視覚的な記憶が再現をめざし、夢思想に形象化への表現可能性を与えるとフロイトは考えた。この可能性とはエネルギー、欲望の力と言えよう。「夢の作業」では夢思想が歪曲されることは検閲を理由にするけれども、歪曲の原動力となるのは欲望である。退行の考え方によって、「夢の作業」はエネルギーと夢思想の出所を得て、ますます確固たるものとなる。

複雑な「夢の作業」を組み立ててゆく過程のフロイト自身の作業には、理屈を越えた並々ならぬ情熱が感じられる。フロイトは自らの夢「イルマの注射の夢」において、患者イルマの病気に対して責任を負いたくないというフロイト本人の願望を、様々な人物とのエピソードを思い起こすことによって明らかにしてゆく。イルマが口を開けるのを嫌がるシーンが、歯並びの悪い家庭教師のことを思い出させたり、窓際に立つイルマから、突然窓際に立つ別の女性を思い出すといった具合に、フロイトの連想のくぐり方は文章として整えられたとは言え、連想状況をよく伝えられると思われる。圧縮、置き換え、形象化への配慮それぞれのメカニズムにはエネルギー論的な見方が中心となり、夢思想間の意味連関、ひいては顕在夢に現れた内容の意味をとらえることには重きは置かれてなかった。だから夢思想がどのようにして夢内容になったかは説明付けられても、ふと、突然、連想が浮かびあがる現象そのものの偶然性はフロイトと言えども解き明かせなかったと言えるのではないだろうか。あの一連の連想こそ、自律性をはらんだフロイト自身のイメージ行為と言えよう。フロイトは、夢には解釈の網の目をくぐりぬけ、どうしても解明できない「夢の臍」があるとも述べている。それは完全な解釈がありえないことを示している。夢の自律性は、解釈によって意識の側に完全に統合されることはなかった。「夢の作業」の中にも、意味とエネルギーの間にフロイト流の解釈を排除するようなブラックボックスがある。また自由連想が夢思想と同等視されることによって、夢の自律性は新たな場を見いだしたと考えられよう。

#### IV. イメージの自律性と拡充法

夢、そしてイメージに取り組むもう一つの姿勢として取り上げなければならないのはユングのものであろう。ユング心理学ではとりわけ夢およびイメージが大切にされ、夢分析は治療技法の中心に据えられている。タイプ論の中の定義集ではイメージおよび夢を含む夢想（ファンタジー）の項は象徴の項と並んで多くの頁を要しており、その重要性和複雑さが伺われる。さらにマイヤー<sup>8)</sup>によればユングの夢について詳細な論文は数少なく、それは夢の複雑さと夢への姿勢の反

映であった。夢を論じることと夢を分析することとは、異なる営みでなければならなかった。こうした事情もあってここではフロイトに見たような夢理論を捉えることはできないわけだが、夢およびイメージに対しどのように取り組んだかを見てゆきたいと思う。

ユングは先の定義集においてイメージ (Bild) を「詩の慣用句としての“思い浮かべること”すなわち夢想イメージを意味する」と述べ、「無意識的な夢想活動」によるものではあるが、その際の意識状態も関与しているため、解釈にあたっては意識と無意識を相互に関連させる必要があるとしている<sup>9)</sup>。ユングの夢分析の場合、イメージは意識に対し補償的な意味を帯びているという捉え方をする。あるいは意識と無意識の葛藤から生じたと考える場合、また意識の態度変容をめざす無意識の傾向と捉える場合がある。そしてイメージの中でも神話の主題と一致するような根源的イメージが現れた場合は、個人の意識・無意識を越えて集合的無意識の関与を考え、補償作用とは異なった無意識的過程を想定した。ユングはフロイトの夢解釈を還元的と称しその正当性も認めている。そして夢は因果論的にも目的論的にも理解できるとしながら、ユングは自然現象としての夢を目的論的に捉える道へと導かれた。確かにフロイトとユングとは共通しているところもある。例えば「夢の作業」でみたエネルギー論的な考え方は、ユング心理学にも認められる。しかしながらフロイトが夢の要素とエネルギーとを切り離して考える傾向がみられたのに対し、ユングの場合は夢想 (ファンタジー) の定義に見られるように、心的生命活動・心的エネルギーはイメージや内容の形でしか現れないものとして、エネルギーとイメージは絶えず一体に扱われているように思われる。物理学のエネルギー論をどう象徴的に扱うかに両者の間に違いがあるのかも知れない。

おそらくはそれよりも大きな違いが現れているのが夢へのアプローチ法である。フロイトの自由連想法に対し、ユングは拡充法を用いた。自由連想では連想は“直線的”に発展し、最終的には欲望へと達するが、拡充法では常にあるテーマについて“集中的”に連想する。拡充法は個人的経験を連想する個人的拡充から始まる。そして個人的拡充では連想できないが、夢の中で重要な役割を演じているような夢要素には、似たテーマを持った昔話や神話などを分析家が提供し、連想を深め夢の意味を豊かにしてゆく。また、言語心像に蓄積された象徴をもとにして、例えばライオンの一般的に言われる「権力」を拡充するなど、連想を媒介としない場合さえあるという<sup>10)</sup>。夢の中の要素すべてについて拡充を行い、全体として意味を見いだそうとするのである。自由連想が夢思想として取り上げられたのとは異なって、顕在内容は最後まで生かされ、その荒唐無稽さも擬装ではなく、より直接的に捉えようとする。これはちょうどフロイトのいう「夢の臍」への接近ともいえよう。また夢の自律性を克服してしまうのではなく、拡充によって補強する方向がとられるといってもいいだろう。

また集合的無意識を仮定することに伴って、象徴は夢分析において大きな役割を担っている。ここで拡充法と象徴との関連をみておきたい。マイヤーが例にあげたうつ状態の初老男性の夢は、魚釣りがうまくいかずいらした患者が三叉の矛をつかんで、すぐにみごとな魚を突き刺すことができた、というものだった<sup>11)</sup>。三叉の矛が拡充の素材として取り上げられる。マイヤーはすぐさまポセイドンの三叉の矛を思い出し、ポセイドンの神話を読み解いてゆく。そしてファリクシクシなシンボルでもある三叉の矛をファロスのメタファーと解釈しないことで、より根源的で創造的な力の象徴としての意味に出会うのである。夢はポセイドン神話を拡充されることによって現

実の意味の世界から遠のき、太古的な意味を引き受け、イメージの世界に動き始める。神話の物語性が夢の持つ物語性を強化し、さらに劇的な様相を帯びてくる。このように拡充法は顕在内容と象徴を直接結び付けると言えよう。またこの例で注意すべき点は、治療者であるマイヤーが伝えたこれらのポセイドン神話との関係を患者自身は連想することが出来なかったことである。そうではあっても患者のうつ相は一時的に鎮静した。私たちにあっては納得のゆく解釈であるかないかは、あくまで二次的なことであると考えなければならないだろう。夢を見た本人は、その象徴の意味するところを私たちのように意識の関与したいわば言葉のレベルではわかることはできなかったのである。しかしながら、患者はそういつてよければ身体と無意識の不可分なレベルでわかったのである。イメージの自律性は、夢に不合理な内容として現れることだけでなく、そこに潜在するであろう象徴理解のあり方までも含みこんだ、イメージ行為として考える必要があるであろう。

拡充法による解釈もクライアントと治療者の対話のうちになされる。そこで交わされる言語は、日常の意味内容からより詩的な言語へと向かう<sup>3)</sup>。それはある象徴作用が働いたであろう言葉の誕生当時へと遡ることである。「詩的イメージは語る存在の根源にわれわれをうつす」というパシュラールの言葉にも示されるように、夢を拡充するのは神話や昔話の語られた根源へ向かうこと、つまり単に素材を提供することではない<sup>10)</sup>。拡充法に従って語られる言葉は「文体」をもち、その表現の背後に人間の個性の存在を感じさせる「かたち」が求められるのである<sup>3)</sup>。それは「心理療法の過程が生じるための容器」<sup>3)</sup>の役割が治療者に求められていることとも関連しているであろう。そして、クライアントと治療者が共に、夢の拡充をより根源的な方向に向かって進めるのである。拡充の現場に私たちは立ち会うことは出来ないため、最も重要な過程がどのように進んだのかはわからない。詩的言語による対話とは、客観的視点では捉えることの出来ない、イメージ行為ではないだろうか。

## V. 内的なふるまい、まなびとしての自律性

さてここまではイメージの自律性を、意識によって制御できない、つまりある観念的、概念的なまとまりを無視した働き、行為として捉え心理学上の知見をもとに概観してきた。実験心理学では感覚、知覚器官との関連で捉えられた。またフロイト、ユングにおいては考え方が違うとはいえ、意識と無意識の構造を仮定したうえでの認識であった。イメージにおける自律的性格とは、見方を変えると意識の論理では理解し難い不合理な現象に与えられた、意識の側からの記述である。不合理に見えるのは、合理的枠組みからみたひとつの規定であるだけに過ぎない。この不合理性をフロイトは、「夢の作業」の機制を想定することで合理性にひきいれようとした。けれども、「夢の作業」は先に見たように、力と意味の錯綜した構造であった。それは意識的心理学的思考の限界なのだろうか。夢における心的過程の洞察と局所論の発展とは同時進行であり、退行の考え方に見られるように動きを空間的、時間的にとらえ、もっぱらエネルギー論的に説明付けられた。またユングにおいては、神話や昔話の世界を集会的無意識として規定しなければならなかった。それはフロイトの「夢の作業」とは別の意味で、イメージの自律性を意識、無意識の構造に組みこむ結果にもなったと思われる。夢に関するユングの論文が少ないのは、夢、イメージをこ



の構造内で説明する合理化の弊害を感じとってのことであろう。

フロイトの『夢分析』は臨床体験に基づいた確信から書かれたものである。欲望の発見へと向かう実際の夢分析の場はどのようなものだったのだろうか。マイヤーは「三叉の矛」の夢で、ファロスのメタファーとして解釈することを戒めた。象徴の理解としてはアナロジーに留まっているというわけである。けれどもより深い創造性と関連させる理解とは相互排他的ではないと思われるのである。ファロスのシンボルとして捉えた場合、欲望との連関で夢思想が取り出され、たとえそこで解釈が終わり完結したように見えたとしても、実際にはより深い象徴への道は開かれているのではないだろうか。また、もし治療者が間違った解釈をすれば、夢は常に自律的に作用し心的過程を絶え間なく進行させている無意識的材料によって、時と共に厳しく仮借なく訂正されることになる<sup>12)</sup>。詩的言語として捉えるなら、夢思想もユングのいう意味での象徴との結びつきが完全に断たれたとは言えないだろう。自由連想と拡充では連想の系列が異なるのは先に見た通りだが、夢をもとにして何かを思い浮かべようとする点は共通しているといっていいたいだろう。夢は私たちを引きつけ、さらにイメージすることを促そうとする。

坂部<sup>12)</sup>はその著『ペルソナの詩学』においてアリストテレスのミメシス（模倣再現）を手がかりに、文化の構造と動態について論じた。模倣再現のわざとしての「ふるまい」を通してその人間学的諸相を捉えようとした。坂部の論はイメージ行為を考える上で多くの示唆を含んでいると思われる。長くなるが引用しておきたい。

模倣再現のわざは、動物の反射的本能的行動の次元を越えた人間特有の文化の形として、自然に根ざしつつ自然を越えたときに〈第二の自然〉とも称される〈ならい〉の世代から世代にかけての伝承・継承の根底にも、〈ならう〉こと、〈まなぶ〉こと、〈まねぶ〉ことという、この場合も自然に根ざしつつ自然を越えると同時に、ここでは、とりわけ、他者を目指し他者を範としての自己の超出という意味での自己の二重化のはたらきが存することを指示するにほかならないこと。

これまで見てきたイメージ行為は、何かの現れ、何かをうつしだすことであった。うつしだされる対象は意識化できる対象ではないが、未だ意味不明の何かをなぞらえる結果がイメージ内容としてようやくかたちを持つのである。そして自律的にうつしだすことは、固定した鏡のような存在とは違って、独自のふるまいである。ここでうつすというイメージ行為を、筆者は一種内的な模倣再現化と考えてみたい。また個人的拡充から集合無意識的素材へと連想を深める際も、劇的構造をとらえようとするのも、対象を予感しながらの模倣再現と捉えてみようと思う。

坂部はまた、模倣再現に喜びを感じるということは、生存の必要あるいは現実原則などの自己に外在する目的的手段ではなく、模倣表現がむしろそれ自体真の喜びとして、自己目的的内発的な活動（エネルギー）に他ならず、〈ふるまい〉が本質的に遊びの契機を含んでいることを示すと述べている。これらをイメージの行為にも当てはめてみることに何ら問題はないと思われる。イメージすることも自己目的的であり、きわめて内発的な行為であるはずだ。また、〈第二の自然〉とは私たちが考えてきた象徴に他ならない。そして象徴への〈まなび〉の行為からは、象徴を受動的に受け入れるのみならず、そのつど象徴を生きる姿勢を再確認させられる。〈まねび〉の対

象を象徴的に予感的に理解しているのは、イメージの結果に気づく本人ではなく、イメージの行為そのものと言えるかも知れない。また〈ふるまう〉喜びは、悲劇特有の快があるように、「自然の本性にかなった性能の活動」をその筋がいったん妨害し、筋の逆転や発見的再認によって、より純化して獲得することであり、より能動的な快の獲得である。恐ろしい夢やイメージも、内発的で自己目的な営みとして〈ふるまい〉とみるとき、生きるという根源的な快の獲得を目指そうとしている現れなのである。

イメージの自律性を私たちが感じとるのはその現れを通してでしかない。イメージの行為の中で生じている自律的にイメージすることと、イメージされることとの関係は、坂部の言う自己と他者の関係といえるだろうか。予感される模倣の対象、イメージされる対象は、どこか異和感をひそませて他者性を帯びていると思われる。イメージするのは自分の中のもう一人の自分ではあるけれども、他者性も帯びている。だからイメージの結果を感じとる側から見ると、イメージ行為の主体は捉えきれないのである。しかし、上に示された、自己が他者に体现された範型を生きることによって自身を越えるという関係はイメージの行為にもあてはまるように思われる。そしてこの自己と他者の関係、そして自己の二重化に示される働きはクライアントと患者においても、拡充法における関係にも見ることができる。それぞれは決して排他的ではなく、相互主体的に活動するのである。私たちはクライアントとイメージを共有することに治療的意義を認めてきた。今後、体験内容の検討と共に、それぞれの体験に共通の「イメージすること」の意味を捉えることも不可欠ではないだろうか。

## VI. 今後に残された問題点および課題

イメージをめぐる問題の一つには言葉の事情があると思われる。訳語の不統一についてははじめに述べた。そして心像というより「イメージ」という語が日本語のなかに定着しているようである。しかしながら、日本語が外来語をカタカナ表記で区別しているように、この語は本来の日本の精神風土からある種の距離を置かれるいるとも言えるのである。つまり日本人にとって「イメージ」はどうしても、発生の根源が共有できないまま抽象性を帯びた言葉に留まっていることになる<sup>14)</sup>。こころの問題として「イメージすること」を捉えるためには、「歌の心」に表されているような、詩的言語としての日本語の動態についても考察を深める必要があるだろう。

注)『夢判断』中の精神分析用語は、『精神分析用語辞典』にしたがった<sup>15)</sup>。

## 文 献

- 1) 藤岡喜愛 イメージと人間 日本放送出版協会 1984.
- 2) 田嶋誠一 壺イメージ療法 創元社 1987.
- 3) 河合隼雄 イメージの心理学 青土社 1991.
- 4) 河合隼雄 イメージの意味と解釈(「イメージ」成瀬悟策編) 誠信書房 1971.
- 5) Richardson, A.: Mental Imagery, 1969. (鬼沢 貞, 滝浦静雄訳『心像』紀伊國屋書店, 1973).
- 6) Freud, S.: Die Traumdeutung, 1900. (高橋義孝訳『夢判断』フロイト著作集2 人文書院 1968).
- 7) Ricœur, P.: De l'interprétation essai sur Freud, 1965. (久米 博訳『フロイトを読む』新曜社

高月：イメージ行為について

- 1982).
- 8) Meier, C. A.: Die Bedeutung des Traumes, 1972. (河合隼雄監修【夢の意味】 創元社 1989).
  - 9) Jung, C.G.: Psychologische Typen, 1921. (林 道義訳【タイプ論】 みすず書房 1987).
  - 10) Jung, C.G.: Kindertraume, 1987. (氏原 寛監訳【子どもの夢】 1992 人文書院).
  - 11) Bachelard, G.: La poétique de L'espace, 1957. (岩村行雄訳【空間の詩学】 1969 思潮社).
  - 12) Jacobi, J.: Die Psychologie von C.G. Jung, 1959. (高橋義孝監訳【ユング心理学】 1973 日本教文社).
  - 13) 坂部 恵 ベルソナの詩学 岩波書店 1989.
  - 14) 柄谷行人 日本精神分析 「批評空間」No.5 福武書店 1992.
  - 15) Laplansche, J. & Pontalis, J.-B. 1967. (村上 仁監訳 【精神分析用語辞典】 1977 みすず書房).

(博士後期課程)